

周平さんは幻ではなかった!

開封するまでに、随分と勿体ぶってしまった。往時の女学生はこんな綺麗な字を書くのか、と感心させられる筆跡の表書きだった。缺を入れる。確かに縮小複写された手書きの謄本。四ページ分がホッチキスで一つにとめられている。

■「養父・正岡周平」

●本籍 福岡県鞍手郡直方町大字直方六十六番地

●戸主 正岡重吉 出生/慶應元年(一八六五) 六月九日

●父 亡 田中利平

●母 カメ 貳男

●養父 正岡周平 養子

「養父、周平」か。やっと周平さんの実在が証明された。この安堵感はなんだろう。

書き込み欄に目を移す。明治二六年(一八九三)、重吉二十八歳の時、「風早郡粟井村大字河原、田中嘉蔵」の弟として西明神の正岡家へ入籍している。父親の利平はすでに亡くなっているか隠居しているかして、家督を兄の嘉蔵が相続した様子が窺える。そして、明治三十一年(一八九八)一月七日、重吉三十三歳の時、「上浮穴郡明神村大字西明神正岡慶三兄(トシテ)分家ス」とある。もう一つ意味が飲みこめないが、ここは祖母正岡クラの欄と引き較べると、少しは事情が読めてくる。

●妻 クラ 出生/明治五年(一八七二) 四月二二日

●父 渡部長五郎

●母 コマ 貳女

愛媛県上浮穴郡明神村大字西明神正岡慶三父同周平養女

実家戸主愛媛県風早郡粟井村河原渡部長五郎明治三十一年一月十日入籍

■戸籍簿の刻まれた変動の意味

「明治三十一年一月」に何か重大な出来事が起こったのは間違いない。夫の重吉は養子先の正岡慶三から分家する。その届け出が一月七日。妻クラが周平の養女として父・長五郎の籍から正岡籍に入ったと理解できる。これが『駆け落ち』した二人を周囲がどう庇ったか苦心の痕がわかるというものだ。そして、このときクラは臨月で、入籍した直後(明治三十一年一月一日)に長男・順吉が出生している。一気に正岡重吉夫妻の環境が変動している。

花嫁衣装のまま重吉のもとへ走ったクラの実父・長五郎は河原村きつての豪農で、明治二六年の国会議員選挙人(納税額十五円以上の男子)名簿に名を連ねている。納税額二二円九〇銭。河原村で田中直巳につぐ長者なり。わが父・徳一の話も満更、作り物ではなかったようで、クラさんは「長五郎さん」の二女だったのだ。

西明神の正岡家。栄谷と呼ばれるもとも当日当たりのいい場所にある。



それから次の変動が戸籍簿に露われて来るまで十八年の歳月が経過する。日露戦争、第一次世界大戦が起り、年号も明治から大正へと変わった。時代的な考察は別の機会に譲るとして、正岡姓を名乗ってからの重吉一家は幸福だったろうか。

西明神の正岡家とどんな交流があったのか。これは、まだ推察の域を出ないが、二人を正岡周平さんの養子にしたのは、渡部長五郎さんの差し金に違いない。周平さんはやがて家督を慶三さんに譲って隠居する。慶三さんは久萬山でも評判のやり手。村長、県会議員を務める。そして、米相場に手を出して破産したという筋書きが用意されているようだが、それはどうやら西明神正岡家の事とは思えない。このあたりも、六月に予定している取材行の重要課題である。

私註・慶三氏の社会的業績を追って、「愛媛県会議員略伝」（明治二九年）「愛媛県紳士月旦」（明治三〇年）「愛媛県紳士列伝」（三一年刊）を捜し当て、例のマイクロ・フィッシュ映写室に立て籠もった。が、残念ながら捕捉することができなかった。が、一つ、新しい収穫があった。

■道後鉄道社長・正岡正敬という注目すべき人物

正岡正敬（松山市）に関する記述を「紳士月旦」で発見したので、忠実に採録しておく。

「嘗テ道後鉄道会社長トシテ、多年道二横(判読)ハリシ障害ヲ掃ヒ、世評ヲ恐レス誹謗ニ屈セヌ経営辛苦遂ニソノ功ヲ告ケテ地方ノ便益此ヨリ大ナルハナシ ソノ豪腹ニシテ自ヲ信スル處ニ向テハ一步モ仮借スル處ナク断乎トシテ事ノ成功ヲ期ス故ヲ以テ或ル部分ニ於イテハ誹謗アルト雖モ君ハ無頓着ナリ

道後鉄道ノ起ル豈ニ故ナカラシヤ ソノ事業家トシテ先見明ニ機ヲ見ル敏ニ變ニ應スル的策略ニ長タリ大ナル權略ナシト雖モ、胸中ノ經綸ハ従来横溢察スヘカラサルヲ見ルヘキナリ」

要するに道後鉄道を成功させたが、かなりの計略家だ、と筆者・奥村次郎が指摘している。「道後鉄道」と「伊予鉄道」は違うのか。父の言っていた「正岡家が伊予鉄をやっていた」というのは、この「道後鉄道」なら間尺が合ってくる。「日本歴史地名大系三九」によれば、松山市の近代化の動きに触れながら「二八年道後鉄道会社が道後・一番町・三津口に汽車を走らせ」と紹介している。が、五年後の明治三三年に先発の伊予鉄道会社に吸収合併される短命な会社であった。かつて、松山市内から馬車電車が道後温泉まで走っているのを「映画・坊ちゃん」で観た記憶がある。松山中学の生徒が気に食わぬ教師に生卵を投げつけたシーンがそれだった。その馬車鉄道が電車に追われた話を、父から聴かされたような気がする。調査の手掛かりとしては有効である。この「正敬」社長と「久万山正岡家」とは、どういう関係なのか。また回り道してしまった。十八年目の変動について、であった。

大正七年一月二三日、愛媛県温泉郡粟井村大字久保三六五番地
第二ヨリ転籍

一家が正式に「福岡県鞍手郡直方」に入籍した痕跡である。長男の順吉は数えて二一歳となっていた。その年の二月一九日受付で「乗松シナヨ」との婚姻届けを出している。乗松シナヨ(明治二九年二月八日生)は同じ「愛媛県温泉郡堀江村福角」の出身で、二つ年上の姐さん女房である(嶋津良枝さんの母)。

式男・重徳(明治三一年七月五日生) 父母の欄に何の異常もないのに、兄・順吉とは半年も差がない。加えて出生届けも四年後の明治三五年十一月八日、といういい加減さ。ま、当時はそんなものだったのかも知れない。

長女・キミエ(明治三四年五月六日生) 多分、この頃は落ち着いた暮らしを粟井村で送っていたのだろう。明治三四年五月十一日届出/温泉郡粟井村戸籍吏大森盛直受付。同月十三日送付入籍とある。安定した生活でないとこんな風にきちっと出来るはずがない。このキミエさんは、大正一四年一月七日に「鞍手郡直方町の木嶋眞義ト婚姻」とあり除籍されている。つまり、筑豊地方が生活拠点になっている証拠であった。

続いて、わが父・徳一は三男である。明治三十七年（一九〇四）五月一〇日生。昭和二年（一九二七）鞍手郡直方町大字山部三五〇番地老福原伊四郎次女はるゑと婿養子縁組、婚姻ノタメ除籍されている。わが亡き兄・昭次（昭和二年六月一日生／一九九一年死亡）の母であるが、兄が2歳の時に急逝したと聞いている。わが家の仏壇にひっそりと、そのひとの位牌が匿われていたり、見知らぬ女性のアルバムがあったり、それを見つけて出して「これ、何や」と母に訊ねて、慌てさせた遠い記憶。

四男の鶴一と五男・亀一は双生児であった。ともに明治四〇年八月二四日生。鶴一はいまも健在で、安部姓を名乗っている。亀一は大正三年一二月に七歳で若死にした。その死亡届出が鞍手郡宮田村で受け付けられている。ということは、すでに大正三年（一九一四）には筑豊で生活していることを物語っている。すると、大正七年になって久保の三六五番地第二から除籍したのはいかなる理由からか。一つには長男の結婚（大正七年二月）と孫にあたる幸孝の誕生（大正七年二月一七日生）であろう。菓子製造が軌道に乗ってきたのかも知れない。「本籍ニ於イテ二月二六日受付入籍」とあるから一月前に「栗井村」から転籍しなければならぬ理由は分かる。そして、大事な指摘が気がついた。一旦、明神村に移した戸籍が「久保村」に転籍してあることだ。早速「久保三六五番地」を「ゼンリン住宅図」で調べてみた。多分、地番は当時のものが通用する番地の書き込み方であった。



すぐ下の弟・都留一叔父にコーチする父・徳一の競輪時代

県道湯山・北条線を粟井坂方向から北上する。河原村は粟井川を渡ると、旧久保村となる。この辺では賑やかだったと思われる中心部に差しかかる。右に折れば、「久保集会所」と標識の出るあたりに「渡部五郎」宅。東隣が旧家の「西原組」の事務所。そこが三六五ノ一。そして北隣に世帯名の入っていない広い一画がある。三六五ノ二。今を溯ること八〇年前に、正岡重吉・クラ一家はここで暮らしていたのだろうか。隣家が「渡部五郎」というのも符牒が合いすぎるとはいはあるが、結局、ある時期から、クラの実家の庇護を受けていたと見るべきなのか。

●大正一五年（一九二六）一〇月二六日午前七時、本籍ニ於テ死亡全居者正岡順吉届出。

享年、六一歳だった。

●昭和二年四月二五日正岡順吉ノ家督相続届出アリタルニ因リ本戸籍ヲ抹消ス

これが送られてきた「戸籍謄本」が語りかけてくるもののか、か。「以下余白」のあと、この謄本は除籍原本と相違ないことを認証す、直方市長名とその印が捺してある。

この度は思いもかけず、風早の郷へありがとうございました。何度も読み返し楽しんでおります。

嶋津良枝さんは「除籍謄本」に、便箋を一枚、添えてくれた。

松山市福角（ふくずみ）甲五二九 高橋憲一 亡父高橋正義

この方から祖母クラが四国に里帰りの折りは、必ず高橋宅に立ち寄り泊まっていたと聞いています。

高橋宅は四国正岡・渡部クラと親戚になると思っています。ごく近くに私の母（旧姓・乗松シナヨ）の親戚があります。二〇年も前になります、高橋正義宅と乗松スガエ宅に招かれましたのは、松山市福角 乗松忠則 その母 乗松スガエは健在です。お役にたつことがあればと書き添えました。

正岡姓占有率調べ 慶三さんの後継か

旅立つまでに、準備できるものは、なにか。

時を塞ぎ止めることは、だれも出来ない。『風早郷』からの呼ぶ声が、やっぱり聴える。「汝、急ぎ往け！」と。国会図書館で揃い上げられる資料も、すでに手詰まりの観があった。そこで、調査の基本に戻って、電話帳による、『正岡姓』調べだけは済ませておくことにした。

■西明神の「正岡姓」

上浮穴郡久万町西明神の『正岡姓』（昭和六〇年現在／電話帳

調べ・番号略)

正岡 巖(碎石)	西明神	昭	東明神
健司	〃	明男	〃
鎮雄(農業)	〃	伊佐美	〃
宗三	〃	喜久男	〃
定	〃	信男(豆腐製造)	〃
建美	〃	光義	〃
哲男	〃	安則	〃
富良	〃	靖	〃
等	〃		(以上八戸)
道隆	〃		
義盛	〃		(以上二一戸)

因みに、西明神と東明神を除いて、久万町には三三戸の「正岡姓」があり、同じ上浮穴郡では、小田町が一戸、美川村が一五戸と比較的多く、柳谷村は三戸、面河はゼロだった。

■松山市は四〇万人で二〇六戸の占有率

調査時点の年代のずれはあるにしても、『風早』の「正岡氏の系譜」に付記されている「玉川町」の「正岡姓」調べと較べても、どちらが本貫地だか迷うくらい、その数が匹敵しているのに、改めて驚いた。

竜岡(上下) 二〇戸 葛谷 一七戸 長谷(三反地) 一五戸 鍋地ミヤマ・大野スルギ一四戸 鬼原(鈍川) 一二戸 鴨部など一二戸。合計して八〇戸か。氏姓占有率は一・三三%、久万町単独の五二戸は〇・五六%。やっぱり玉川優勢か。とはいっても、玉川町は人口約六〇〇〇、久万町は九三〇〇。どちらも過疎化に悩む山間部の町村だ。愛媛県内でも都会集中化は避けられないだろう。発祥の地・北条市は三万四〇〇〇の人口で、三〇戸。氏姓占有率は一〇〇〇分の一に過ぎない。松山市(約四〇万)ではどうか。二〇三戸。一〇〇〇戸に一戸の割合であった。都会部では「正岡姓」は一〇倍に薄められていた。

■伊予武士団の光と影

旅立つ前の準備として、これまでに「北条市誌」に始まって、「玉川町誌」「東予市誌」「愛媛県史」「仕七川村誌」「美川村二十年誌」「面河村誌」と、郷土史誌に「正岡氏」の痕跡を求めてきた。この作業は期せずして、中世から近代、明治・大正期にいたる、伊予武士団の光と影、脈動と滅びの姿を知るきっかけともなった。それでなければ、ぼくの作業は、単なる出自探しの自己満足に陥ってしまうだろう。手元を集まった資料を、どう活かしていくか。それなりの時間と精力を費やしたものを、このまま眠らせるつもりもない。近く、「北条ふるさと館」の竹田覚館長、高縄神社のそのころの宮司であり、『風早誌』の主要執筆者として「娑婆山」「河野の聖母」などを発表している玉井利明氏にお

目にかかる約束が出来ている。その時までには、もう一度、資料の点検をし、補足すべき部分の洗い出しもしておきたい。心がすでに「風早郷」へ翔んでしまっているのは、間違いない。

国立国会図書館での欲しい史料は、もはや漁り尽くしたのだろうか。昭和四三年に刊行されたはずの「久万町誌」は、係り女性に検索してもらっても、やっぱり納品されてない。これは現地の図書館に頼らざるを得ない。竹田館長には「北条市誌」を拝借できるように、事前をお願いしているが、「ふるさと館」にはないものだろうか。

■慶三さんの後継か

昭和九年に「愛媛新報」が刊行した『愛媛県紳士録』を、あまり過大な期待もしないで、取り寄せてみた。第一、昭和九年といえば、こちらが知りたい「正岡慶三村長」の時代とはずれが大きいし、新しく追跡の標的として登場した道後鉄道の「正敬社長」は、さらに時代を溯らねばならない。

真っ先に「上浮穴郡之部」の項に目を光らせる。「菅廣綱」さん、か。記憶にあるぞ。そうだ、あの「面河村」第一四代村長だ。昭和九年当時は郡会議員、郵便局長も兼任するなど、元気なご様子。そして……。

正岡公平 明治三〇年一月一九日生

原籍 明神村字西明神

現住所 全 右

職業 村長

家族 妻 シズエ(明治三四年二月一六日生)

長女 きよ子(大正八年六月六日生)

二男 侶 則(全一三年二月一五日生)

二女 郁 子(全一五年五月七日生)

三男 昭 和(昭和三年十月一六日生)

四男 幹 和(昭和六年二月二九日生)

経歴 君は大正六年県立松山農業学校卒業後同村技術員として大正一〇年迄勤め同一一年より昭和四年迄郡役所に在勤す 昭和八年一二月本村々長に就任方今に至る現今養蚕組合長及び信用組合理事を兼任す

現住所、経歴からみて、「周平」「慶三」の「久万山・正岡氏」の後継者と判断してもいいだろう。年齢的にも「慶三」の息子であつても不思議ではない。このあたりが新しい「上陸地点」となりそうで、重要な収穫であつた。この他、「正岡玉位」の名が挙げられている。明治二九年生れで、東明神に住んでいる。職業は農業。『愛媛県人名録』で紹介された「正岡助太郎」の長男に生まれ、小学校卒業後専ら農業に精励し、区長、社寺総代等に選任され、昭和九年一月、同村々会議員に当選す、とある。

越智郡からは「太八」「金右衛門」の常連の登場で、新鮮味に欠けた。

と、ここまで来て、あつ、と気がついた。過日の「正岡姓調べ」は現時点のものだから、家族構成と照合すれば、どの電話番号が該当するか、分かるはずではないか。

まず、西明神の「公平さん」。残念ながら符合する家族名はない。すでに、この村から離れてしまったのか。それは考えられる。その点、東明神の「玉位さん」は、大地に根を下ろして踏んばって生きているはずだ。家族欄に「長男 昭」とあり、昭和六〇年版電話帳にも「昭（電話番号は略す） 東明神」と記載されている。なぜだか、ほっとしてしまふ。それでも、「公平さん」の二男「侶則」という特徴のある名前に出会った記憶がある。もう一度、電話番号リストを「久万町」から見直してみる。あった！「侶則（電話番号略） 栄谷」。加えて、「昭和 住安」と、三男も同じ久万町に転出していたわけであるが（これはぼくの勉強不足、栄谷は「のうたに」と読んで、西明神の字であった。下掲の西明神村の絵図を参照されたい）、となると、西明神の家はどうなってしまったのか。ぼくの予感通りに「周平・慶三」家に繋がる血筋であるならば、大正一三年生まれの「侶則」氏、昭和三年生まれの「昭和」氏兄弟には、ぜひお目にかかりたいものである。

